社会知性開発研究センター

ラオス・ビエンチャンで国際シンポ

アジア産業研究センター

メコン地域の潜在性が発表された第一部の報告会

社会知性開発研究センター／アジア産業研究センター（研究代表＝小林守商学部教授）はラオス国立大学経済経営学部と共催で国際シンポジウムを8月9日、ラオスのビエンチャンで行った。テーマは「メコン地域におけるビジネス環境」。ラオス国立大学経済経営学部のコンサワン・サイヤラ講師の総合コーディネートにより、同大学の教員・学生のほか、ラオスの企業経営者、ラオス訪問中の香港城市大学の教員・学生らを含めた約70人の聴衆を前に関連の研究成果などが報告された。

同シンポジウムは2部構成で実施され、第1部は内野明商学部教授の司会のもと、メコン地域のビジネス開発の潜在性を小林とラオス国立大学経済経営学部のピヤ・ウォンピット講師がそれぞれ、国際サプライチェーン（供給網）と周辺国とのビジネス環境競争力比較の視点から報告を行った。また、第2部は本学会計学研究所の協力を得て、ラオスと日本の会計制度・教育の比較に関するパネルディスカッションが行われた。

パネルディスカッションでは会計学研究所の伊藤和憲教授（司会）、菱山淳教授、国田清志教授、石原裕也教授、谷守正行准教授（以上商学部）、山﨑秀彦教授、岩田弘尚教授（以上経営学部）が、ラオス側からはラオス最大手飲料メーカーであるラオ・ブルワリーをはじめとしてITコンサルタント企業、人材派遣会社の経営幹部ら4人がパネリストとして参加し、両国の会計制度・教育の相違と問題点を掘り下げて議論した。

本国際シンポジウムは岩尾詠一郎商学部教授（アジア産業研究センター事務局長）と小林が本年度初頭からラオス側と準備を行ってきた。今後、会計制度・教育問題に関してはラオス国立大学のみならず、ラオスの商工会議所、財務省、教育・スポーツ省とも連携しながら関連調査プロジェクトの推進を図ることになった。（小林守）

社会知性開発研究センター

古代東ユーラシア研究センター

東西の人の流れを報告

会場からの質問に答える講師陣。左から關尾氏、荒川氏、成氏、高久教授

社会知性開発研究センター／古代東ユーラシア研究センター（研究代表＝飯尾秀幸文学部教授）のシンポジウム「古代東ユーラシアの国際関係と人流」が7月14日、神田キャンパスで開催された。中央アジアから日本までつながる古代の国の関係や人々の動きについて3人の専門家が講演。239人が熱心に聴講した。

同センターは、文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に2014年に採択された。今年度がプロジェクト最終年度となる。シンポジウムの冒頭、飯尾代表が「中央アジア―中国―朝鮮半島―日本でどういう人の流れや物の行き来があったか、プロジェクトの中心をなす報告となる」とあいさつした。

新潟大フェローの關尾史郎氏は4～5世紀、戦乱を逃れ北部中国から黄河西方の河西や中央アジアへ移動した人々について報告。西方のオアシス都市国家があったクチャでは河西地域の敦煌と似た様式の墓や喪葬用文物が出土しており、關尾氏は「喪葬文化は民族固有の要素が強く、漢族の移動に伴った可能性がある。混乱した時代ゆえに、漢族の生活空間は広がっていった」とまとめた。

大阪大教授の荒川正晴氏は8世紀ごろまでのソグド人の交易活動について講演。ソグド人は中央アジアのソグディアナ地方出身で西方から中国国内まで、物流・情報ネットワークを作っていた。扱う商品には絹や香料などがあり、法隆寺にはソグド語の焼き印が入った白檀の香木が伝わる。荒川氏は当時の香木の価値の高さなどを示し、流通ルートの謎を提示した。

韓国・忠北大教授の成正鏞氏は、3世紀ごろまで朝鮮半島南部に存在していた馬韓と、その後に続いた百済の対外交流について語った。百済で出土した遺物には中国の陶磁器が多く、高級文化への憧憬（しょうけい）が強かったといえる。百済と倭は文献の記述に比べ考古資料は少ないが、今後の発掘調査や研究への期待を語った。

高久健二文学部教授司会の討論では、東から西への人の流れを論じた關尾氏と、西から東への流れを展開した荒川氏が4～5世紀の中央アジアに点在したオアシス国家の姿について意見を交わした。成氏は朝鮮半島における西域系文物の流入過程や日韓交流のあり方などについて意見を述べた。また、会場から多くの質問が寄せられた。

高大連携

司書の仕事を高校生が体験

カウンター業務を体験する高校生

高校生が図書館司書の仕事を体験する「司書インターンシップ」が7月23、25、27の3日間、生田キャンパス図書館本館で行われた。体験したのは高大連携協定校と教育交流提携校の高校生13人。23日は埼玉県浦和学院高と神奈川県向上高の生徒3人が参加。生徒たちは職員から本学の図書館の概要、大学図書館の役割などを聞き、館内を見学したあと、図書館業務を体験。図書の受入、整理、利用サービスの各業務を行った。

参加した高校生は「スタッフとしての目線を経験できたので図書館の利用の仕方が変わってくると思う」と話していた。

図書館秋の企画展

「フランス革命を知ろう！ 2018―新たなフランス革命像を探し求めて―」

▽会期・時間＝10月15日（月）～11月4日（日）11時～16時30分※土・日曜と10月30日（火）は休み。ただし10月20日（土）、11月3日（土）、4日（日）は10～15時で開催▽会場＝生田キャンパス図書館本館（9号館3階）研修室▽内容＝専修大学所蔵の「ミシェル・ベルンシュタイン文庫」から、フランス革命期の陳情書、女性の権利に関する資料、山岳派独裁やロベスピエールにまつわる資料、フランス革命期のカリカチュアなど約30点を展示。

地域住民向け図書館説明会

生田キャンパスの専修大学図書館本館と生田分館の地域住民向けの説明会が7月14、16の両日開かれ、計15人が参加した。

参加者は職員の案内で約128万冊を収蔵する本館で説明を受けた。自宅が生田キャンパスまで徒歩10分という女性は「家から一番近い図書館。中学生の娘の参考になるような本も探してみたい」と話した。

利用できるのは18歳以上。川崎市多摩区に在住・在勤で川崎市立図書館の利用登録者はカード発行料無料。神奈川県立図書館の利用登録者はカード発行料1000円、1年ごとの更新料500円。いずれも1回5冊まで20日間借りられる。

会計学研究所

公開講演会のお知らせ

会計教育100周年・会計学科50周年

公開講演会を会計学研究所と共催で開催します。学部学科にかかわらず、本学学生や一般の方も参加できます。（事前予約不要）

▽講演者＝齋尾浩一朗氏（㈲あずさ監査法人ＫＰＭＧジャパン統合報告センター・オブ・エクセレンスパートナー）　▽テーマ＝「統合報告書を読んでみよう～企業価値の創造を理解する～」　▽日時＝10月16日（火）10時45分～12時15分　▽場所＝生田キャンパス10号館10301教室

会計学研究所

ラオスで実態調査

ラオス商工会議所で

会計学研究所は受託研究（公益財団法人山田長満奨学会）「メコン地域の簿記教育と企業における簿記実務の現状の調査・分析～ラオス国の調査研究を中心として～」の一環として、8月7日から12日までラオスで実態調査を行った。簿記・会計に関連する継続的なプロジェクトで今回はラオス国立大学とのシンポジウム、ラオス商工会議所での簿記検定試験などの協議、ラオス財務省会計局での質疑応答による会計制度の現状分析、ラオス教育・スポーツ省センデゥアン・ラチャンタボーン大臣への表敬訪問、ラオス企業BNN Company Limitedでのインタビュー調査を実施した。

一行は商学部の伊藤和憲教授、国田清志教授、石原裕也教授、谷守正行准教授、経営学部の岩田弘尚教授、山﨑秀彦教授。

専修人の新しい本

日本経済論―史実と経済学で学ぶ

櫻井宏二郎著

本書は、大学生と一般ビジネスマン向けに書かれた日本経済のテキストである。「史実と経済学で学ぶ」と副題にあるように、特徴は歴史的経緯と経済学的視点を重視しているところにある。

江戸や明治から始まるところは経済史のようであるが、人的資本理論を持ち出し、生産要素賦存に注目するところは開発経済学に近い。また日本的経済システムのルーツを探るのは本書の隠れたテーマである。後半は、バブル崩壊とアベノミクス、今後の人口減少の影響などにページ数が割かれ、近年の経済事情の解説となっている。

専門知識なしで読めるよう平易な言葉で書かれており、経済・経済学の入門書としても薦められる。（日本評論社・本体2600円＋税）

著者（さくらい・こうじろう）＝経済学部教授。日本経済論。

過労自死の社会学―その原因条件と発生メカニズム

小森田龍生著

労働者の自死問題は、過労自死（過労自殺）と呼ばれ、その主たる原因は長時間労働・働き過ぎであると考えられてきた。しかし、日本で長時間労働を強いられる労働者は多数存在するが、ほとんどの場合、健康をむしばまれながらも自死には至らない。長時間労働だけを原因と捉えていては、労働者の自死問題の実態を見誤る。

では、労働者を自死に追い込む長時間労働以外の要因とはいかなるものか。本書はこの点について、判例を対象とした計量分析と事例研究により、職場での人間関係上の問題（ハラスメント等）が鍵であることを明らかにする。証拠が残りづらく、線引きも難しい人間関係上の問題への対策は容易ではない。それでも、日本人の「働き方」が問われているいまこそ目を背けずに議論を深める時機だ。

2017年度専修大学課程博士論文刊行助成による出版。18年8月重版。（専修大学出版局・本体2600円＋税）

著者（こもりだ・たつお）経営学部非常勤講師。労働社会学、死の社会学。